



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（看護学）
報告番号	甲第1838号
学位記番号	第22号
氏名	伊藤 聡子
授与年月日	令和3年3月24日
学位論文の題名	循環器疾患患者におけるせん妄ケアの質の向上を目指した看護師に対する教育的戦略 (Strategies for Nursing Education to Improve the Delirium Care Quality for Circulatory System Disease Patients)
論文審査担当者	主査： 明石 恵子 副査： 山田 紀代美, 薊 隆文, 窪田 泰江

氏 名：伊藤 聡子

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：第22号

学位授与年月日：令和3年3月24日

学位授与の要件：学位規程第4条第1項該当

論文題目：循環器疾患患者におけるせん妄ケアの質の向上を目指した
看護師に対する教育的戦略

Strategies for Nursing Education to Improve the
Delirium Care Quality for Circulatory System Disease
Patients

論文審査委員：主査	教授	明石	恵子
	副査	教授	山田 紀代美
	副査	教授	薊 隆文
	副査	教授	窪田 泰江

博士論文要旨

I.はじめに

急性期病院ではせん妄リスクの高い患者が多く、予防や発症に対する看護実践が不可欠である。せん妄ケアのガイドラインでは、医療者の教育がせん妄の予防や発症後の早期離脱に役立つとされているが、教育方法は詳細に述べられていない。そのため本研究は、循環器疾患患者におけるせん妄ケアの質の向上を目指した看護師に対する教育的戦略の構築を目的とした。

II.重症患者におけるせん妄に関する医療者に対する教育の実態（第1研究）

1.目的

文献検討によってクリティカルケア領域における医療者に対するせん妄の効果的な教育方法を明らかにする。

2.方法

文献データベースを用いて、2000年1月から2012年12月までの文献を検索した。検索条件を抄録つき原著論文、日本語または英語で発表されているもの

とした。キーワードは「せん妄」「delirium」と「集中治療」「ICU」「クリティカルケア」「critical care」（小児を除く）とし、それらを組み合わせて検索した。その結果、医療者を対象とするせん妄に関する教育介入を行った 12 文献が抽出され、分析対象とした。

3.結果および考察

教育対象者は看護師のみが 7 件であった。教育期間は 2 日から 3 か月間で、評価時期は、介入前後のもの、介入前と段階的に介入後に評価したものがあつた。せん妄の教育介入によって、医療者のせん妄に対する知識、せん妄評価スケールの使用率と判定の一致度が上昇し、患者のせん妄持続期間や薬剤使用量が減少した。教育方法は、12 件すべてで講義を行っており、講義に加え、視聴覚教材の利用、事例検討、せん妄評価の訓練や支援者へのフォローアップなど複数の方法を取り入れることが効果的であることが示唆された。

Ⅲ.アクションリサーチを用いた看護師に対するせん妄の教育（第 2 研究）

1.目的

看護チームで行ったせん妄患者の事例検討を通して、循環器疾患患者のせん妄ケアに関わる看護師の意識と行動の変化を明らかにする。

2.方法

循環器疾患患者のせん妄ケアに興味のある看護師 7 名を対象にアクションリサーチを用いた教育介入をした。研究期間は 2013 年 1 月～2014 年 4 月であった。研究者は、看護チームの会議に参加して看護師の様子や終了後の研究実施病棟でのせん妄ケアに関する病棟看護師の言動、ケア内容を記録した。

分析対象は、看護チームによる会議の逐語録と議事録、自己内省ジャーナル、フィールドノート等とした。分析の視点を①せん妄ケアを提供する上での課題、②課題を改善するための方策、③チーム看護師の気づき、④チーム看護師を含む病棟看護師の行動の変化とした。そして、看護師のせん妄に対する意識やケアの変化に注目し、大きく変化した時点を転換点と考え、一つの局面として命名した。

3.結果および考察

看護チームの会議は 14 回開催され、それらは 3 つの局面に分けられた。第 1 局面を【部署のせん妄ケアの状況把握とその対策につなげる方法の模索】、第 2 局面を【せん妄事例からの発症要因の探求とケアへつなげる手立ての発見】、第 3 局面を【事例カンファレンスの重要性の認知と検討結果の実践への適用】と命

名した。

第1局面では「せん妄評価」「薬剤の使用方法」、第2局面では「腹部大動脈瘤術後患者のせん妄要因」「興奮の強いまたは認知症のある患者の対応」「長期人工呼吸器使用患者の睡眠援助の方法」、第3局面では「急性大動脈解離患者の対応」に関する課題・方策・気づき・行動の変化がみられた。また、全過程を通じて、「新人や異動者に対するせん妄の教育」「病棟看護師に対するせん妄の教育」に関する課題・方策・気づき・行動の変化がみられた。そして、せん妄患者に使用する薬剤一覧表の作成と活用、薬剤に関する勉強会や眠剤調整カンファレンス、新人・異動者に対するせん妄の教育が病棟看護師によって実施された。

せん妄患者に対する苦手意識や負の体験から課題を見出し、改善の方策を検討して実施し、評価することで、研究に参加した看護師がせん妄ケアの成功体験を重ね、病棟全体に変化を起こすことができたと考える。

IV.せん妄に対する教育介入前後の新規せん妄患者の実態調査（第3研究）

1.目的

教育介入前後の研究実施病棟におけるせん妄患者の実態調査を行い、教育介入による患者のアウトカムへの影響を明らかにする。

2.方法

第2研究の実施病棟に入院した患者を対象とする後方視的診療録調査を行った。調査対象は、2013年と2015年の1～3月に入院した患者とした。

調査項目は、①患者背景；診療科、年齢、性別、既往の有無（認知障害、脳血管疾患、精神疾患）、疾患、手術または血管内治療の有無など、②非薬物介入（せん妄リスク評価、適正な水分管理、不動化を避けるケア、見当識の刺激ケア、便秘のケア、重症アセスメントなど）の実施患者数、③薬物介入（鎮痛薬、ベンゾジアゼピン系薬、抗精神薬、漢方薬）の実施患者数、④アウトカム；在棟期間、転帰、新規せん妄患者数、せん妄持続期間、インシデント（事故・自己抜去、転倒・転落など）発生患者数、身体拘束実施患者数とした。

これらについて、2013年（介入前）と2015年（介入後）を比較し、SPSS23を用いて分析し、有意水準5%未満を有意差ありとした。

3.結果および考察

調査期間中に入院した循環器疾患患者は、介入前414人、介入後453人であった。このうち新規にせん妄を発症した患者は、介入前16人（3.9%）、介入後

23人（5.0％）で有意差はなかった。

新規せん妄患者において、せん妄リスク評価の実施率は、介入前の0人（0％）から介入後は10人（43.1％）と上昇し、ベンゾジアゼピン系薬の実施率は、10人（62.5％）から5人（21.7％）に減少していた。見当識の刺激ケア、便秘のケアは、介入後の方が減少していた。

せん妄リスク評価が増え、ベンゾジアゼピン系薬の使用が減少したのは、教育介入の中でせん妄評価の重要性が何度も話し合われたため、せん妄ケアの重要項目として認知されたと考える。

V. せん妄ケアの質の向上を目指した看護師に対する教育的戦略

本研究の結果からせん妄のケアに関する効果的な教育的戦略として次の4点を提案する。

- 1)せん妄ケアの質向上をともに目指せる人材を集める。
- 2)せん妄のガイドライン等で示されている内容について、自施設で実施できていることと実施できていないことをチームで共有し、課題を明確にする。
- 3)事例検討において自施設での問題点を抽出し、解決策を考えて提案する。
- 4)提案された解決策の実施状況を把握し、失敗や成功体験を振り返り、場を設けてフィードバックする機会をつくる。その場において、ケア内容の解決策を修正し、実施・評価を繰り返す。

審査結果の要旨

急性期病院では、高齢者の先進医療・高度医療が進み、せん妄のリスクが高い。せん妄発症患者は在院日数の長期化や死亡リスクの上昇、長期予後の悪化などが認められ、せん妄予防と発症からの早期回復は、急性期病院での喫緊の重要課題である。しかし、せん妄発症者は後を絶たず、医療者はせん妄対策に追われている。このような背景のもと、本研究では、せん妄の発症率の高い循環器疾患患者におけるせん妄ケアの質向上を目指して看護師への教育戦略を検討した。

第1研究では、医療者を対象とするせん妄に関する教育介入の文献を検討し、講義、視聴覚教材、事例検討、せん妄評価の訓練など複数の方法による教育が効果的であることを確認した。

第2研究では、せん妄患者の事例検討会議を通してアクションリサーチによる教育介入を行い、看護師の意識と行動の変化を検討した。14回の会議によって【部署のせん妄ケアの状況把握とその対策につなげる方法の模索】【せん妄事例からの発症要因の探求とケアへつなげる手立ての発見】【事例カンファレンスの重要性の認知と検討結果の実践への適用】が見いだされ、研究に参加した看護師がせん妄ケアの成功体験を重ね、病棟全体に変化を起こしたことが明らかになった。

第3研究では、教育介入による患者への影響を確認するため、後方視的診療録調査を行った。介入前後でせん妄の発生率に差はなかったが、介入後にせん妄リスク評価の実施率上昇とベンゾジアゼピン系薬の使用率低下が認められ、教育の効果であると考えられた。

以上より、せん妄ケアの質向上のための教育戦略として、①せん妄ケアに関心をもつ人材の確保、②ガイドラインとの比較による自施設のケア実施状況の分析、③事例検討による問題点の抽出と解決策の提案、④提案事項の実施とその評価が必要であることを示唆した。

審査では、せん妄ケアの目標、研究の動機、教育介入による看護師の変化の理由、研究実施施設における現在のせん妄ケアの状況などが質問された。また、第1研究の位置づけや表記の統一についての修正が求められた。そして本研究は、長期間にわたる研究者の教育介入をアクションリサーチによって丁寧に分析し、当該病棟の看護師の意識と行動に変化をもたらし、現在もそのケアが継続されている点が評価された。また、提案された教育的戦略は、せん妄ケアの質向上に

寄与する可能性があると考えられた。

以上より、本論文は、本学学位規程に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査および最終試験に合格と判定した。